



ペーター・ヴォールレーベン著『樹木たちの知られざる生活』「友情」より

木が一本しかなければ森はできない。森がなければ風や天候の変化から自分を守ることもしない。バランスのとれた環境もつれない。

逆に、たくさんの木が手を組んで生態系をつくりだせば、暑さや寒さに抵抗しやすくなり、たくさんの水を蓄え、空気を適度に湿らせることができる。木にとってはとても棲みやすい環境ができ、長年生長を続けられるようになる。だからこそ、コミュニティを死守しなければならない。一本一本が自分のことばかり考えていたら、多くの木が大木になる前に朽ちていく。死んでしまう木が増えれば、森の木々はまばらになり、強風が吹き込みやすくなる。倒れる木も増える。そうなると夏の日差しが直接差し込むので土壌も乾燥してしまう。誰にとってもいいことはない。

森林社会にとっては、どの木も例外なく貴重な存在で、死んでもらっては困る。だからこそ、病気で弱っている仲間に栄養を分け、その回復をサポートする。数年後には立場が逆転し、かつては健康だった木がほかの木の手助けを必要としているかもしれない。互いに助け合う大きなブナの木などを見ていると、私はゾウの群れを思い出す。ゾウの群れも互いに助け合い、病気になったり弱ったりしたメンバーの面側を見ることが知られている。ゾウは、死んだ仲間を置き去りにすることさえためらうという。

(中略)

森に入って、葉の茂る天井、いわゆる“林冠”を見上げてみれば、誰にでもわかることがある。通常、木は、隣にある同じ高さの木の枝先に触れるまでの範囲内でしか自分の枝を広げない。隣の木の空気や光の領域を侵さないためだ。一見、林冠では取っ組み合いが行なわれているように見えるが、それはたくさんの枝が力強く伸びているからにすぎない。仲のいい木同士は、自分の友だちの方向に必要以上に太い枝を伸ばそうとはしない。迷惑をかけたくないのだろう。だから“友だちでない木”の方向にしか太い枝を広げない。そして、根がつながり合った仲よし同士は、ときには同時に死んでしまうほど親密な関係になることもある。

ペーター・ヴォールレーベン著 『樹木たちの知られざる生活 ー森林管理官が聴いた森の声ー』
長谷川圭訳 早川書房 2017年



伊年印 《雑木林図屏風》(部分) 国立アジア美術館フリーア・ギャラリー